東日本大震災

美唄　吉村　誠治

災害は忘れた頃にやって来る寅彦の戒め今現実に
千年に一度と言はるる大地震人智の虚しさ今更に知る
放射線医学の講義で教へたるシーベルト単位日々のテレビに
50ミリシーベルトは一年の許容量テストに必ず出すと教へき
言ひ捨てし天罰発言肯定す「贅沢は敵だ」の世に育ち来て

ナナカマド

札幌　浜島　泉

街路樹のナナカマドの実群鳥の餌(えじき)となりてすさまじき痕
病妻の喀痰が減り通ひ来る夫の顔に安堵の緩み
坂の上スキーマラソン応援す外国選手ストック捧ぐ
鳴り雪を踏みしめて行く日の出前まさに大寒白き道路の
首まはり巻くマフラーが煩はし雪は凍れど風心地よし

旅の途次

釧路　児玉　昌彦

卒業後半世紀を経て集いたるヒポクラテスの静かなる宴
医の道の門口に立ち迷いたる若き日の悩み友にもありき
大悟してブッダの道を説く友の過去に秘めたる愛欲の日々
七十で仕事を止めて好きなこと打ちこまんとして病得し人
いまもなお答え求めて旅の途次人生これで良かったのかと

津波の町にて（救護班員雑詠）

栗山　高田　剛太

幾万の命奪いし三陸の海蒼くして波しずかなり
一面の瓦礫の中に残りたる桜の枝に花は咲きたり
辛きこと声高に語る人もなく待合室に皆は寄り添う
その船に己が名つけし漁師来て俺の代わりに沈めりと言う
幼児(おさなご)に乳ふくませし母親のその刹那のみ消ゆる悲しみ

北海道医歌人会詠草

嘆息

旭川　稲積　文子

世事知らぬ二人の知恵を合せても先見えぬまま夜は更けゆく
国からの委託を受けて入学せし学生には学生の発想あるらし
努力する苦労は避けて自我通すを受け入れられず終止の寝酒
一箱のティッシュペーパーも使い終えまだ鼻汁も痰も治ってはくれぬ
引っ掻いて叱られしことにこだわりて昼餉の時にも猫寄りつかず

東日本大震災

江別　三宅　浩次

懐かしの浄土ヶ浜の白壁に津波の爪の痕いかばかり
避難してと緊急放送叫びつつ波に呑まれし乙女哀しや
御遺体は見せぬ定めの映像に瓦礫の下へ想いは走る
家々も車も船も浚い行くこの世のものと誰ぞ思うや
千年に一度とはいえ想定の外と済ませるリスク管理か

晩春の福寿草

札幌　山口　康徳

早春は人あつめたる福寿草盛りすぎるやげにも閑散
もの云はぬ魑魅魍魎の寄せくるを雄々しくとき待つ某国の人
季節(とき)いたり春酣の南国に噴火の被害おそふはうらめし
激動の社会に乗じわるさする人の心は悪霊住や
人工衛星(えいせい)の船長となりし若狭さん気宇壮大なるをわれら学ばむ

日本沈没

札幌　古屋　統

幼き日夜半に地震(ない)あり後長く津波の惨を聞きし思い出（昭和8年三陸沖地震）
宮古なる浄土が浜も田老なる防潮堤も見る影は無し
防潮堤世界に誇示し大津波跳ね返せると人ら信ぜし
教科書の庄屋が稲に火を放ち村を救いし故事も虚しき
原発の安全神話まぼろしと吹っ飛び消えて日本が沈む